

# 愛着型の相違が青年の失恋経験における 意味づけに及ぼす影響

○上野山莉加・岡本祐子<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>広島大学大学院教育学研究科)

## 問題と目的

様々な喪失経験の中で、青年にとって、失恋は身近に感じられ比較的経験しやすく、また青年の価値観や人生に大きく影響する。よって、本研究では、青年の失恋経験に焦点を当てる。なお、本研究の失恋経験とは、飛田(1992)の定義より、“一定の期間継続した親密な関係が崩壊・解消した出来事”とする。近年、喪失経験のようなストレスフルな出来事を乗り越える対処法の一つとして、“意味づけ”が注目されている。

青年期は心身の発達に伴って恋愛や性への関心が高まり、親密な関係の対象が親から友人、恋人へと移行していく時期である。Bowlby(1969)は、愛着は“ある特定の人と他の特定の人との間に形成される愛情の絆”であると述べている。Batholomew(1991)は、Bowlbyの内的作業モデルを参考に、愛着型の類型化モデルを提唱し、「安定型」、「拒絶型」、「とらわれ型」、「恐れ型」の4つに愛着型を分類した。愛着型によって成長契機感情や成長過程行動に違いが見られること(山影, 2010)から愛着型によって、失恋経験に対する意味の付与や自己成長感に影響を及ぼすと考えられる。

近年、意味づけ研究が盛んに行われているが、ある特定の出来事に焦点を当てたものは少ない。そこで、本研究では、愛着型の相違が、青年の失恋経験に対する意味の付与や自己成長感に及ぼす影響を検討することを目的とする。

## 方法

**調査対象者** 大学生312名(男性158名、女性153名、不明1名)を分析対象とした。平均年齢は20.2歳、 $SD=1.4$ 。

**手続き** 集合調査にて質問紙を配布、回収した。

**質問紙の構成** (1)中尾・加藤(2004)による成人愛着スタイル尺度(ECR)、36項目、7件法。(2)過去3年以内の失恋経験の有無。(3)宅(2005)によるストレス体験に対する意味の付与尺度、13項目、4件法。(4)宅(2005)によるスト

レスに起因する自己成長感尺度、30項目、4件法。

(5)フェイス項目(所属、学年、年齢、性別)。

## 結果と考察

**因子分析** ECRにおいて、探索的因子分析を行った結果、【見捨てられ不安( $\alpha=.90$ )】、【親密性の回避( $\alpha=.90$ )】の2因子構造となった。なお、各因子の平均値を算出し、平均値の高低で調査対象者の愛着型を分類した。次に、意味の付与において、探索的因子分析を行った結果、【ポジティブな側面への焦点づけ( $\alpha=.89$ )】、【出来事のもつメッセージ性のキャッチ( $\alpha=.87$ )】、【出来事を経験した自己に対する評価( $\alpha=.85$ )】の3因子構造となった。また、自己成長感において探索的因子分析を行った結果、第1因子から順に【自己に対する評価( $\alpha=.91$ )】、【物事に対する寛容の受けとめ( $\alpha=.90$ )】、【世界的評価( $\alpha=.77$ )】と命名し、3因子構造となった。なお、因子分析はいずれも最尤法、プロマックス回転で行った。

**愛着型と意味の付与、自己成長感との関連** 失恋経験有群において、愛着型を独立変数、意味の付与、自己成長感の下位尺度得点を従属変数とし、1要因の分散分析を行った結果、いずれの得点にも有意差はみられなかった。この理由として、本研究の調査対象者が比較的健康な青年であり、愛着型が平均値に集中していたことが考えられる。

**失恋経験有群と無群の比較** 失恋経験有群、無群において、意味の付与、自己成長感の下位尺度得点に差があるかを検討するために、失恋経験の有無を独立変数、意味の付与、自己成長感の下位尺度得点を従属変数とし、 $t$ 検定を行った。その結果、【ポジティブな側面への焦点づけ】において有意差がみられ、失恋経験無群より失恋経験有群の方が、得点が有意に高かった( $t=3.66, df=310, p<.01$ )。このことから失恋という対人関係上のストレスフルな出来事を乗り越えることによって、愛着型に関わらず、出来事と十分に向き合い、肯定的な意味の付与をすることが示唆された。